

捕らわれて Wormwood

海賊になりたい？そいつは、難しいようで簡単な話だ。まず、それらしい街に行く。初心者にお勧めなのは、Port Peril あたりだろう。それから、港で待つ。すると、カーゴを満載にした船がやってきて、積み荷を降ろし始める。だがよく見ると、乗ってる人数はえらく少ねえ（理由はいろいろだな）。これが、戦いから帰ってきた海賊船、ってもんだ。こういう船を見つけたら、あとはその出航前に、夜の港や、荒くれ酒場なんかで待ってればいい。リクルーターがやってきて、あんたを海賊にしてくれる。面接？そんなもんはねえ。必要なのはそこそこいかつい見てくれと、運だ。海賊の仕事は効率が良いんでな、面倒な手続きは一切無しだ。一服盛られるか、後頭部に一発くらうかして、気がついたら船の上、こうして新米海賊のできあがりって訳さ。お、もう寝ちゃったのか。…おい、お前等こいつを運んで船倉にぶちこんどけ。

■集められた 6 人の志願者達

「まだ寝てるのか、この愚図共！起きろ、下っ端共。起きてデッキに集合だ。さもないと、キャプテンハリガンが貴様等の肉をソーセージにして、フィッシュガッツに朝飯として揚げさせるぞ！」

バハンガ、ネリネ、バンザイ、タイバンリー、？、？は、罵声で目を覚ました。目の前には鞭を持った海賊が立っている。

全員、なぜ自分がこんな所で罵声を浴びているのか、見当もつかない。ただ、昨日の夜、何かがあって、自分たちはここに連れ込まれたのだろう、ということは推測がついた。

そのうちの一人、老婆ネリネは起きるなり突然言った「クスリー！クスリをおくれ」目が血走っている。全員、だいぶ引いた。ネリネは鞭を持った男に取りすがり、なおもわめき続ける。と、男は鞭で老婆を叩いた。

「ふざけるな、貴様等の持ち物は今となっては全てキャプテンのものだ。さあ、早く来い」

あまりにも横暴だが、徒手空拳で逆らっても得るものは少なからうと、全員おとなしく階段を上って甲板に出る。あたりは、すでに一面の海だった。海賊船に連れ込まれてしまったのだ。

後部甲板の操舵輪から、左目にアイパッチをした筋骨隆々の男がやってきた。

「我々の仲間に入ってもらって嬉しく思う。Wormwood へようこそ！乗組員として"志願"してくれたことに感謝しよう。俺はバーナバス・ハリガン、言うまでも無いことだが、諸君にとってはキャプテン・ハリガンだ。俺が伝えたいルールは一つ：俺に、話しかけるな。俺は話すのは好きだが、諸君らが口を開くのは全く好かん。このルールを守ってくれば、俺たちはうまくやっていけるだろう」

「ああ、それからもう一つ。君たち新しいクルーを加えても、まだこの船は人が十分とは言えない。だから、俺は今のクルーのなるべく保ちたいと考えている。というわけで、殺しをやったやつは竜骨くぐりの罰が待っているんで、そう思ってくれ。…ブラッグ！こいつら陸人を海賊に仕立て上げるんだ。そうすれば、こいつらをサウナボックスにぶち込んで一年と一日熟成させ、まづいパイを作る必要が無くなるからな」

こう言って、ハリガンは歩み去ろうとした。しかし、バハンガは「神の使徒にこんな扱いをするとは罰あたりめ、このままではこの船は呪われるぞ！」とハリガンに向かって叫ぶ。ハリガンはちらりと振り向いたが、そのまま行ってしまった。なおもバハンガが口を開こうとすると、鞭がうなってバハンガをたたきのめした。

起き上がったバハンガの前には、青い服を着て、髪をそり上げて弁髪だけ垂らしている若い男が立っていた。

「俺がブラッグ、この船のファーストメイトだ。くだらんおしゃべりはやめて、こっちへ来い。貴

様らの仕事を決めるため、テストをする」

最初のテストの内容は、マスト登り。ばばあやこども（サイズ）、貧弱な魔法使いなどはほとんど登れない中、病弱だが筋力はあるタイバンリーが最初に登り切って、見事リガー（帆やマスト関係の仕事）に選ばれた。

次のテストは料理のテスト。といっても、プラグが一人ずつ、「料理ができるか？」と聞いていくだけのもの。これに Yes と答えたのは不気味な老婆だった。こうして、ネリネがコックの手伝いをするようになった。残りの者達は、全員スワップ（甲板夫）を務めるようになった。

■海賊のお仕事

リガーの仕事はタイバンリーには辛いものだった。マストの上に登れば、直射日光を遮るものはないのだ。持病の薬が無いことによる過労と、慣れない仕事に日光で、タイバンリーはぐったりしてしまった。

スワップ達の元締めはマスタースカージだ。どうやら、PC 達のことを憎らしく思っている模様。言いつけられた仕事は船底でのネズミ退治。4 人は真っ暗な船底に行き、ドメインパワーの光線やらなにやらでネズミを退治していく。途中、船底に住み着くクモに襲われたりもしたが、問題無く仕事を片付けることができた。とはいえ、特にそれを誉めてくれる人もいないのであった。

ネリネは、コックのアンプロス・クループの所に出頭し、突然チャーム・パーソン。クループは失敗して、ネリネの友達に。彼は一応料理はするが、基本的にはひたすら酒を飲む駄目コックだった。ただ、彼はこの船に長く、また海賊生活も長いようで、色々なことを知っていた。ネリネはその情報を得つつ、この厨房を実験室にしようとするのだった。

■竜骨くぐりと自由時間

仕事の後は夕ご飯の時間になる。が、この日はその前にイベントがあった。それは、同僚を殺した男、ジェイクスマグパイの竜骨くぐりの刑だ。ロープにくくりつけられ、竜骨の下を往復させられる刑で、哀れなマグパイはフジツボに削り殺され（ついでに窒息し）、その残骸は鯨のエサになった。

食後は自由時間で、みんなは思い思いに酒を飲んだりなんだりしている。

ホブノブはダンスを披露し、それがあまりにもへただったためブーイングを受けていた。

タイバンリーは薬を求めて医務室を探していたが、この船の医者というのは大工兼外科医で、治療法といったら「腐る前に切断」くらいしか無いと知って絶望していた。

カミカゼは、美人のベスマラ（海賊神）の神官、サンダラと知り合いになった。サンダラはマスタースカージにいやらしい目つきで見られていて、それが嫌でカミカゼにボディガードを頼みたいらしい。

バハンガはどちらが先につぶれるか賭けをして、ティリーブラケットとラムを飲みまくっていた。

ネリネは、自分のラボにしたキッチンで作業を始めようとしたが、クループにとがめられる。チャームパーソンは1時間しか効かないのだ。変だと思ったクループは詰問し、ネリネの回答が怪しいことを問い詰める。と、ネリネはまたしても呪文をかけようとし、クループは今度はこれに耐え、ネリネを叩きのめしてしまった。

クループはネリネをプラグの所につきだし、「味方に魔法をかけるような奴とは一緒に仕事できん」と言う。プラグは困った顔をして、ネリネに、「魔法は敵にかけるもんだろ、な婆さん」と諭し、ネリネをスワップに、代わりにフレアをコックにすることにしたのだった。

こうして、海賊船の一日は終わった。